

## 森茉莉 『甘い蜜の部屋』と『源氏物語』

—— 女三宮からモイラへ ——

西原志保

一、はじめに

森茉莉のエッセイ「源氏と幼女」には次のような一節がある。

源氏の、紫という幼い女の子への、子供を愛するよう  
うでいて、その底には女を視る品定めがある、きれ  
いでいきな愛情と、又紫の、まるきりあどけないの  
に、きれいな女になってゆく素質のある可哀らしさ  
と、甘えたり、すねたりするさまなどが、なんとも  
いえない「文学の花」ともいえるものである。

私は「こんなものがあるのでは私なぞにはとうて  
いなにもかけはしない」と手がペンを持つ力を無く  
して、だらりとなるのを恐れて、すべて傑作は化け  
もののように恐れて、出来るだけ読まないようにし  
ていたので、「しまった」と思った。ことに私は今、  
幼い女の子の小説を書いており、次の小説もそれに  
きめているからで、(いかにも書き足りないからだ)

全く困った。だが文学は、自分の今書いているもの  
が一番いい、と思つて書くべきで、又そう思わずに、  
書けるはずがない。

棒線部は、『森茉莉全集』「解題」によると、『甘い蜜  
の部屋』のことである。

『甘い蜜の部屋』は、女主人公モイラと父林作との、濃  
密で深い愛を主題にした小説である。茉莉自身は林作に  
ついて、「父親を林作という名前にしたのは失敗だった  
の。(中略)みんな父親のことだと書いてあるのね。あ  
たしは生意気かもしれないけど、もうお父さんのことを  
言ってもらいたくないの」と言うものの、「解題」にあ  
るとおり、「林作の偉大な愛は、鷗外を想わせ、著者の  
うちに生き続けた鷗外を、神に近いまでに拡大した理想  
像」であると考えられ、モイラの体験にも茉莉の実体験  
と共通するものが多い。その意味でモイラと林作との関  
係は茉莉と鷗外の関係を下敷きにしていると考えられ、

自伝的な要素の強い作品と言えよう。しかしながら、茉莉が夫と旅行中で父の死に目に会えず、離婚して実家に戻るのは父の死後のことであつたのに対し、『甘い蜜の部屋』では父の死は描かれず、夫が自殺した後父が、実家に迎える、というように、大きな差異もある。

このエッセイから、『源氏物語』が『甘い蜜の部屋』に影響を与えたとする研究もある。例えば、島内景二／島内裕子「近代以後の享受」<sup>(注5)</sup>では、『源氏物語』を利用した近現代小説の一つとして『甘い蜜の部屋』を挙げ、島内裕子「麿園の茉莉」<sup>(注6)</sup>では、円地文子「麿園」を媒介としつつ、茉莉と末摘花の親近性を指摘する。なお「源氏と幼女」には、初めて『源氏物語』を読んだ、とあり、『甘い蜜の部屋』「第一部」（昭和四〇年、六、七月）「第二部」（昭和四二年二月）の初出とは前後するが、別のエッセイ「与謝野晶子」<sup>(注7)</sup>には、幼い頃「美しい母が傾倒して読んでいた本だ」というので晶子の訳した源氏物語（中略）を尊敬して読みかじっていた」とある。

しかしながら、源氏と紫の上の関係は父娘関係ではなく、やがて男女関係に変わってゆくものである。源氏と紫の上の関係は、父と娘との、恋愛とは違った、しかも恋愛よりも深い愛情を描く『甘い蜜の部屋』から、やはり隔たりがあると思われる。それでは、『甘い蜜の部屋』

に『源氏物語』の影響はないのであろうか。また茉莉は、どのような意図でこの文章を書いたのだろうか。

実は『源氏物語』中には、源氏と紫の上よりも、はるかに『甘い蜜の部屋』に似た父娘関係が描かれている。朱雀院と女三宮である。女三宮は、源氏と結婚して父の元から離れるも、出家によって精神的には再び父の元に戻るからである。以下、朱雀院と女三宮の関係と、『甘い蜜の部屋』の共通点をおさえた上で、差異とその意味を考えてみたい。

## 二、「現実の世界」と「もう一つの世界」

まずは、『甘い蜜の部屋』の冒頭を見ておきたい。

藻羅といふ女には不思議な、心の中の部屋がある。

その部屋は半透明で、曇り硝子のやうな鈍い、厚みのあるもので出来てゐて、（中略）

他人がはつきりと認識してゐる「現実の世界」といふものを、どこか、薄曇りとしたものとして眺めてゐる。

（中略）すべてのこの世の現実が、ほんたうにそこにあるのか、ないのか、その境界が明瞭しない。この世界がこんなに、明瞭しないのだから、死んだあとの世界の方が却つてほんたうに、はつきりであ

るのではないだらうか、と、そんなことを想つてどこかにある、もう一つの世界を空想してみる瞬間さへある。

その世界は、現実にあるやうな、曇つた硝子ではない、完全に透明な、極度に薄い透明の向うにあつて、紅色でも、緑の色でも、みな上に綺麗な透明を、被つてゐる。ちやうど自動車や自転車に附いてゐる反射鏡バックミラーに映る草原や紅い煉瓦の街のやうに、世にも綺麗で、夢かと思ふやうに恍惚とするものなの注10だ。

この冒頭と、『源氏物語』における、女三宮出家後、朱雀院が女三宮に山菜を贈る場面とを比較してみたい。

山里つけてはあはれなれば、たてまつれ給とて、御文こまやかなる端に、

春の野山、霞もたどくしけれど、心ざし深く掘り出でさせて侍るしるしばかりになむ。

世を別れ入りなむ道はをくるともおなじところを君もたづねよ

いとかたきわざになむある。

と聞こえ給へるを、涙ぐみて見給ほどに、おとゞの君渡り給へり。

例ならず御前近きらしいどもを、なぞ、あやし、

と御覽するに、院の御文成けり。見給へば、いとあはれなり。けふかあすかの心ちするを、対面の心にかなはぬこと、などこまやかに書かせ給へり。このおなじ所の御伴ひを、ことにおかしきふしもなき聖言葉なれど、げにさぞおほすらむかし、われさへをろかなるさまに見えたてまつりて、いとゞうしろめたき御思ひの添ふべかめるを、いといとおし、とおぼす。

御返りつ、ましげに書き給て、御使には青鈍の綾一襲賜ふ。書きかへ給へりける紙の、み木ちやうのそばよりほの見ゆるを、取りて見給へば、御手はいとはかなげにて、

憂き世にはあらぬところのゆかしくて背く山路に思ひこそ入れ

「うしろめたげなる御けしきなるに、このあらぬ所求め給へる、いとうたて心うし」と聞こえ給。注11

朱雀院歌にある「おなじところ」との表現は、極楽浄土を指すと通常解されるが、これは『甘い蜜の部屋』にある「死んだあとの世界」に類似する。また、女三宮歌の「憂き世」と、『甘い蜜の部屋』の「現実の世界」、女三宮歌の「あらぬところ」と『甘い蜜の部屋』の「もう一つの世界」は類似し、前者よりも後者を志向している

ことは類似する。さらに、『源氏物語』で父娘の心の対面が「同じところ」「あらぬところ」で希求されていることと、『甘い蜜の部屋』で父娘の「甘い蜜の部屋」が「現実の世界」に対する「死んだあとの世界」「もう一つの世界」として構築されることは類似している。

ところでこの場面では、波線部にあるように、朱雀院の命が残り少ないにも関わらず対面できないことが問題にされている。朱雀院の命の残り少なさは、「若菜」巻冒頭から問題にされており、女三宮の婚嫁もそれと関わっている。それゆえ、この贈答において、現世で対面できないことよりも来世での対面を希求することに重点が置かれていることは、そのような問題を解決するものと捉えられるだろう。

『甘い蜜の部屋』にも、父の命の残り少なさが問題にされる場面がある。結婚後、夫の天上が詠えた寝台の話聞き、林作がその中にいるモイラの時間を想像した場面である。

何かの出来事を機に、モイラがもう一度、自分との世界に還つてくることを希ふのだ。自分とモイラとの、限られた時間、林作の年齢から言つて当然短い筈の期間の中にある、甘い蜜の世界に。閉ざされた、自分とモイラとの甘い蜜の部屋に。(二三〇頁)

「死んだあとの世界」を空想する冒頭は、このような予想される父の死を無効とする装置として設定されていると考えられる。

父の命の残り少なさに関しては、逆縁が回避されることも重要なモチーフであろう。『甘い蜜の部屋』においては、モイラが百日咳にかかる部分がある。『九鬼が死ぬと言つた病人は必ず死ぬ』ということである。「九鬼が死ぬと言つた病人は必ず死ぬ」ということで有名な九鬼博士にモイラの命が後二十四時間と診断された後の場面には、次のようにある。

後二十四時間といふことが絶えず林作の頭にある。時間を忘れてゐようとしてゐる林作の耳に、秒を刻む時計の音が、モイラの生命を刻む音のやうに響いてゐた。

(中略、『タンタジルの死』では、引用者注)、一寸の隙に子供は死の手に奪はれる。二幕目は死を現した扉の舞台装置で、母親が指の爪が剥がれて血を流すまで、その扉を連打するのである。(中略)

だが一夜が明け、翌日の午後になつて、予言の二十四時間を五分過ぎ、十分過ぎて、たうとう五時間経つた時、林作は、モイラの上に奇蹟が起きるのを期待した。(七一頁)

ここでは、九鬼博士の診断という世間的には絶対である

残りの時間は、永遠に引き延ばされている。これは、父の命に関して言われていた、「限られた時間」「短い筈の時間」を引き延ばすために、重要な機能を持つだろう。なお、『タンタジルの死』を説明することによって、生死の境界を暗示しているにも注意しておきたい。

また、発病から一ヶ月たった朝、病室の窓を開けさせた場面では、モイラの様子が「何処か遠い処へ行つてゐて、又戻つて来た子供」(七三頁)に喩えられており、

一月余りの重く暗い日々は、やうやく去り、林作とモイラとの明るい日々が、還つて来た。(七四頁)

ここでは、死の世界からモイラが、再び林作のもとに戻つてきたことが示されている。

このような、逆縁が回避される場面が、『源氏物語』にもある。出産後、女三宮が会いたいと言つてゐることを伝え聞き、朱雀院が下山した場面である。

さばかりよはり給へる人の、物を聞こしめさで日ごろ経給へば、いと頼もしげなくなり給て、「(中略)院のいと恋しくおぼえ給を、又も見奉らずなりぬるにや」と、いたう泣い給。

(中略)

「世の中をかへり見すまじう思ひ侍しかど、なをまだひさめがたきものは子の道の闇になん侍けれ

ば、をこなひもけだひして、もしをくれ先立つ道の、道理のま、ならで別れなば、やがてこのうらみもやかたみに残らむとあぢきなさに、この世の譏りをば知らで、かくものし侍」(柏木、四卷一五頁)

ここでは、女三宮がものを食べないでいたために衰弱したことが語られている。「道理のままならで」とは、逆縁のことであるが、この後女三宮は朱雀院の手によつて出家し、徐々に回復し、逆縁は回避されている。後に引出産後の場面で、死にたいとの思いと同時に尼になりたいとの思いも描かれていることから、出家は女三宮に生への意志を取り戻させる手段であつたのだろう。さらに、女三宮は出家によつて精神的には父の元に戻る。

このように、父の命の残り少なさという問題を解決するために、父娘の結びつきが死んだあとの世界で希求され、生死の境界をも超越するものとして描かれている。

### 三、宗教的庭園と幻の花

次に、モイラの結婚相手である、天上の家が崩壊することについてみておきたい。天上の家は、既に指摘もするように、宗教的な、天上的な庭園として描かれている。<sup>注13</sup>

ところが、モイラが天上家を嫌う部分では、  
もともと、この家に棲みついてはゐなかつたモイラ

の心は、今は全く、この家から離れてゐる。天上との関係も、同じである。モイラは今完全に、厭離の念に捉へられてゐる。(三八八頁)

と、「厭離穢土」を連想させる「厭離」という表現が用いられており、モイラにとって天上家が世俗的な穢土であることを暗示させる。

『源氏物語』においても、源氏の構築した六条院は、浄土をイメージさせるが、女三宮には世俗的なものと捉えられている。例えば、女三宮の持仏開眼供養における、源氏と女三宮の贈答歌では、

蓮葉をおなじ台と契をきて露のわかる、けふぞ  
かなしき

と、御硯にさし濡らして、香染めなる御扇に書きつけ給へり。宮、

へだてなく蓮の宿を契りても君が心やすまじと  
すらむ(鈴虫、四卷七二頁)

とある。女三宮の答歌では、蓮の咲く六条院の主である源氏の心が、「はちすの宿」にすまないだろう、と言われている。その意味でこの歌は、先に見た「横笛」巻の女三宮の答歌にある「憂き世」とも併せて、六条院の浄土性を否定する表現となっている。

このような、宗教的な庭園を世俗的に捉える視点は、

父の宗教に対する特異な見方と関わっている。林作は、モイラに

「基督教といふのはね。世の中で、この人間の世界でうまく……パアパヤモイラが誰とでも仲よくやつて行くために、(中略)こしらへたものなんだ。(中略)支那の孔子や老子と同じやうなものなのだよ」(三四二頁)

と教えているように、宗教を「世の中」「人間の世界」でやってゆくためのもの、世俗的なものとして捉えている。朱雀院も、先に見た女三宮のために下山した場面ですれをこの世に執着が残っているとする批判を、来世や仏道からの批判ではなく、「この世の譏り」、つまり俗世からの批判であると言っている。この逆説的な表現から、宗教に対する朱雀院の特異な見方が窺えるだろう。

また、天上家の庭との関わりでは、モイラが性的な感覚に「覚めた」場面で天上が「その同じ瞬間に、夜の庭の中で、どの花が開いたかを想った」(二四六頁)とあるように、モイラの性的な面が花に喩えられている。さらに「庭の花々よりも、どこの世界の花よりも香気のある、モイラといふ肉で造られた花を得た」歎びが、「偽の歎びであつたかもしれぬ」(三七二頁)とも言われているが、対して林作との関わりでは、「幻の桃李」

であると表現されている。モイラの不機嫌に魅せられた林作が、「モイラといふ綺麗な花の存在を感じ取」つており「愛情の微笑ひは、一層甘やかに」なっていると描写された後、

（だが、これは俺にとつて現実の花ではない。桃李は、幻の桃李だ。冠を正す必要はない……）  
（二四七頁）

とある。「現実の花」ではなく「幻の桃李」であるという表現は、「永遠に交接のない父と娘との間柄」（二九四頁）ともあるように、近親相姦はありえないことを意味する。そこで、モイラの性愛との関わり方を見ておきたい。

モイラは、最初の相手であり後の密通相手でもあるピータアに求められて恐怖を感じていたり（一六六頁）、天上が「モイラを恐ろしい感覚の中に閉ぢこめた」（二四六頁）とあるように、性的に求められることを嫌悪している。

さらに、天上を厭うモイラが、石沼の別荘に行き久々に林作とともに過ごした場面には、次のようにある。

その林作の頬を掠める微笑ひの影に、モイラは自分への深い評価を見る。他の誰よりも深いところにある賞美を見る。肉体を貪らうとする狂気のない、

それを別なところに置いてゐる、賞美を見る。情人への賞美とは別なところにある賞味、深い感覚を見るのだ。天上の、昼も、夜も、自分の肉体を貪らうとし軽い咬み傷をつけ、薔薇の中心の、巻きこんだやうな花弁の中に、花粉をふり滾して触角を埋める蝶のやうになる、賞味より以上のものを、見るのだ。（二九九〜三〇〇頁）

ここでは、天上の愛撫を粘着質な表現で喩えながら、父による、性的な賞味とは別の賞味が、より深く、すばらしいと言っている。

女三宮も、先の「横笛」巻の贈答、出産後の場面「恋しく」などに見るように、父への愛情は描かれるが、男女関係を一貫して嫌悪し、理解していない。

例えば、柏木に対して、柏木が忍んできた場面で、「あさましくむくつけくなりて」「いとめざましくおそろしくて」（若菜下、三卷三六三頁）「よろづに聞こえなやますもうるさくわびしくて」（同、三六五頁）などと、女三宮の恐怖と嫌悪が繰り返し語られている。

さらに、源氏に出家しても「なをあはれとおほせ」と訴えられた場面で、女三宮は

「か、るさまの人（出家者、引用者注）はもののはれも知らぬものと聞きしを、ましてもとよりか、

らぬことにて、いかゞは聞こゆべからむ」(柏木、四卷二八―二九頁)

と説明している。この後源氏が密通の結果生まれた薫を見ながら「あはれ」を知っているはずだと言っていることから、これはとりわけ男女関係の愛情を示すだろう。ただし、源氏は女三宮出家後にしか女三宮にさほど執着しなかったのに対し、天上は徹頭徹尾モイラに執着している。ここには、結婚当初の女三宮を源氏が評して「いとあまり物のはへなき御さまかな」(若菜上、三卷二四〇頁)と思う部分があるのであるが、それを

ただ男のする儘に委せてゐる、なげやりな、懶い臂の表情は、常時変らぬモイラのものである。(中略)  
(天上やピータアは、引用者注)、その巧緻であるべきものとされてゐる技が、モイラの稚いともいへる反応の仕方に及ばぬものだといふことを、モイラを愛撫してゐて、知つたやうだ。(三六九―三七〇頁)  
と読み替えてゆくような視座が、作用しているのかもしれない。

それでは、天上家が崩壊した場面を見ておきたい。次の引用文は、天上が自殺した翌朝、モイラが実家に戻される場面である。

モイラを抱きかかへるやうにしたエセルを中に、二

人は花畑の間を足早に、進んだ。花々は朝の陽を纏け、何こともなかつたかのやうに、静かに咲き群れてゐる。

(中略)

本間いし(天上家の女中、引用者注)が氣配を聴きつけて玄關に出て来たのだらう。遠く、暗い穴のやうな中に一人茫然と、立つてゐる。(四二九頁)

ここで花々は何事もなかつたかのように咲き群れているが、天の園であつたものは、「暗い穴」に変わっている。現実的には「偽」であつた父娘関係の「幻」の花が、真の庭園であつたはずのものを破壊しながら、より濃密な「甘い蜜の部屋」を創り上げたのである。

因みにこの場面は、『源氏物語』における、紫の上の死後、春に源氏が女三宮を訪ねた場面と共通性がある。

「対の前の山吹がみごとに咲くのを、引用者注)植へし人なき春とも知らず顔にて、常よりもにほひ重ねたるこそあはれに侍」との給。御いらへに、「谷には春も」と、何心もなく聞こえ給を、(幻、四卷

一九四頁)

春を愛した紫の上の死など知らぬ様子で、山吹が咲きほこつてしていると源氏は言う。対して女三宮は「谷には春も」と答えるが、これは従来から『古今和歌集』巻第十八



時なりける人の、にはかに時なくなりて歎くを  
見て、みづからの歎きもなく喜びもなきことを  
思ひてよめる  
清原深養父

光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思ひ  
もなし(注15)

を引いたものであると指摘されている。この言葉は、「谷」に自らを比していると通常は解されるが、彼女が住んでいる六条院の春の町を「光なき谷」と言っているともとることが出来る。「光なき谷」と「暗い穴」とは、類似した表現であるといえよう。

勿論このような描かれ方は常套的なものであり、その共通性を殊更に見る必要はないのかも知れない。しかしながら、これまで見てきたような共通性、宗教的庭園を世俗的なものと捉えてゆく娘の視座を考慮に入れると、『甘い蜜の部屋』では物語の終わり、『源氏物語』では正編の終わりで、共通した描かれ方をすることは、意味深まいだらう。

このように、モイラという花は、父を愛し男性を愛さないことよって、天の園であった天上家を崩壊させる。『源氏物語』においても、女三宮の存在は六条院世界を変容させたと言われており、(注16)彼女は父を愛し男性を愛さ

ない。

四、断片的な言葉と語り手の位相——差異について——  
ここまでは共通性を中心に見てきたが、最後に、差異を中心にとめておきたい。

まず、物語的に明確な違いは、死ぬのが『甘い蜜の部屋』では夫である天上であるのに対し、『源氏物語』では密通相手である柏木であることである。モイラが天上に、

「ピーターアつて、知つてる？」

(中略)

「きつと、知つてる」(四一一〜四一二頁)

と言った後天上は自殺するのであるが、『源氏物語』では、密通を源氏に知られた後逆に柏木が病気になる(若菜下、三卷三九九頁)、女三宮の出家を聞いて衰弱し(柏木、四卷二〇頁)、死ぬという展開になっている。

ただし、天上にしても柏木にしても、より嫌われているという点では共通している。ピーターアとの密通があった後の場面に、

「ピーターアの方がいい。守安は薄のろいんだ。何をしても、何を言つても、薄のろいんだ。……」

神様のやうな顔をして……バアバが一番い

い) (三七六頁)

とあるように、モイラにとって天上よりはピーターアのほうが優位にある。

一方『源氏物語』では、女三宮が懐妊した場面に、次のようにある。

院(＝源氏、引用者注)をいみじくをちきこえ給へる御心に、ありさまも人の程も、ひとしくだにやはある、(中略、柏木を、引用者注)、おさなくよりさるたぐひなき御ありさまにならびたまへる御心には、めざましくのみ見給ほどもに(若菜下、三卷三七七頁)

ここでは源氏と比較して柏木に対する嫌悪が語られている。そのような意味で、柏木と天上の役割は同じなのである。

また、柏木の文を源氏に見つけられる場面は、女三宮がそのように仕向けたとも読みうるものである。というのも、文を発見されたのは、小侍従に柏木の文を押し付けられた夜、紫の上の元に帰ろうとする源氏を、女三宮が引きとめた結果(若菜下、三八〇～三八二頁)だからである。女三宮は柏木を嫌悪しているのであるから、夫であると同時に保護者でもある源氏に救いを求めたい気持ちもあつたのではないだろうか。さらに、密通があつ

た後、悩ましげにしている女三宮を源氏が見舞いにくる場面では、「かくけしきも知り給はぬも、いとおしく心ぐるしくおぼされて、宮は、人知れず涙ぐましくおぼさる」(同、三六八頁)と、密通を源氏が知らないことに對して、後ろめたく思っている。先に見た『甘い蜜の部屋』の場面は、女三宮が源氏に柏木のことを言いつけたかったのだという、茉莉なりの解釈を下敷きとし、利用したものではなからうか。

次に、女三宮は出産するが、モイラの懐妊、出産は天上の妄想の中に留められるという点も、物語的に明確な差異である。天上がモイラの不機嫌を慰めようとして、自分の会社に勤めているロシア人の社員と、モイラの実家である牟礼家の馬丁であるドウミトゥリイを夕食に呼ぶ場面を見ておきたい。

天上はその時別のことを、考へてゐた。(中略、モイラの顔色が蒼い、引用者注)赤子誕生の歡びは、そこにはなくて、天上がもはやどこかで確実に探りあててゐる暗い運命の影が当然、赤子の誕生といふ歡びのときめきである筈の予感の中に入りこんでゐる。その、不倅なものを伴つてゐる不安な胸騒ぎは、又、やよものでもあつた。

ドウミトゥリイは、モイラの結婚以後は前より以

上に林作の生活に近く、触れ合ひを持つて来てゐる。

モイラを知ることではやよの比ではない。ドウミトウリイは先刻からモイラを見てゐて、退屈と苛立ちから来た顔色だらうと判断してゐる。(三九〇頁)

波線部は、モイラが実家に帰ることを天上が考えていることや、結末から、赤子誕生の代わりとして天上の死が予感される、という文脈であろう。ところが、ここではモイラを熟知しているドウミトウリイの視点によつて、モイラの懐妊は否定される。

ただし、モイラも女三宮も、出産を受け入れていないという点では共通する。モイラに関しては、林作がモイラの最初に不機嫌になつたときを回想する場面で、そのような感覚が説明される。

又モイラは赤ん坊といふものに興味がない。興味がないといふ以上に、それについて一種の拒絶反応を示してゐるのを林作は見た。自分が持つてみないでも、なんとなく面倒だ、うるさい、と思つて嫌ふのは違つてゐる。赤ん坊とモイラといふものが、全く無縁のものであつた。(二〇六頁)

ここでは、モイラと子どもとが無縁であつて、モイラが拒絶反応を示していることが、モイラ自身には意識され

ずに、林作の視点によつて説明されている。

対して、女三宮に関しては、出産後の場面に出産に対する嫌悪が示される。

宮は、さばかりひわづなる御さまにて、いとむくつけう、ならばぬことのおそろしうおほされけるに、御湯なども聞こしめさず、身の心うきことをかゝるにつけてもおほし入れば、さはれ、このついでにも死なばや、とおぼす。(中略)、厄にもなりなばやの御心つきぬ。(柏木、四卷二二―二三頁)

「いとむくつけう、ならばぬこと」と、出産のおぞましさとそれへの違和感が語られ、「おそろしう」思つたのものも食べられない。さらに、死にたいとの思いも語られている。このように女三宮は、出産という経験を通して事後的に出産への嫌悪を自覚している。

このような差異は、『源氏物語』と『甘い蜜の部屋』における語りの差異によるものもあるだろう。そしてこの語りは、女三宮とモイラの言葉の質とも関わつてゐる。そこで女三宮もモイラも、言葉が断片的で、意図的に行動することがないことを押さえておきたい。

モイラに関しては、友人のノエミの境遇を訊く場面で「モイラの断片的な、意味の取り難い話」(二四九頁)とあり、モイラの手紙に関して、

天上の家に來てから少間して、林作に宛てて書いた唯一度の手紙も、短いもので、日常話す時のやうな稚い言葉が、切れ切りに書かれてゐただけである。

(三二〇頁)

とある。また、天上が石沼で後を通つたピーターアからモイラとの過去の關係を感じた場面には、

モイラには、執着といふものが無い。(中略) 一刻、一刻の気分で、どんな方向にでも行く、意志といふものすら無いやうに見える。(三二四頁)

とある。さらに天上の死に顔を見たモイラを友人のエセルが見て、

(モイラの顔が、引用者注) 自分以外のことには關心の無い一人の男が、さほどのこととも思はずに屠つた女の死顔を見た場合の、愕きの顔である。(四二五頁)

と思つてゐるやうに、モイラはさほど大きな悪意を持つていない。これらは、「一刻一刻の気分」とあり、幼時のモイラについて「モイラの感動はすぐに消えて、持続性がない」(二二頁)と説明されているやうに、モイラが持続性のある時間ではなく、その時々のお分の中で生きてゐることによるのだらう。

女三宮に関しては、その言葉が短いと説明されること

はないものの、描かれている会話文や心内語などは、短く断片的である。また、先に引いた「幻」巻の場面にあるやうに、女三宮の「何心ない」、つまり意圖のない様子が強調されている。さらに、出家後に「いまはもて離れて心やすきに」(鈴虫、四卷七五頁)とあることなどから、その時々のお分の中で生きてゐることが窺われる。

最後に、語り手の位相について見ておきたい。「源氏物語」の語り手は、源氏に近い立場をとり、女三宮を幼いと批判するだけで、ほとんど理解しない。それゆえ女三宮の断片的な言葉を読み手が構成してゆくことは難しいが、それが異質な言葉であることによつて、語り手や源氏の言葉を相対化する。

最初に見た「横笛」巻の場面を例に取ると、朱雀院の贈歌は女三宮の視点によつて語られるが、源氏が訪ねてくると源氏の視点に切り替わる。源氏は朱雀院の文を見、女三宮の視点では描かれなかつた箇所注目した後、朱雀院の贈歌に対して自分なりの解釈によつて評価する。そして答歌を書く女三宮と、その下書きを手取る源氏が描かれ、源氏の解釈とは相反するやうな女三宮の歌が、源氏の視点によつて語られる。最後に源氏は女三宮の歌に対して自分なりの解釈によつて批判し、それを彼女に言うのであるが、まさにそれによつて「憂き世」の意味

は六条院に限定される。

一方『甘い蜜の部屋』の語りは、三人称的でありながら、その視点はあくまでもモイラに寄り添っており、他の登場人物の視点に移るときでも、彼らはほぼ正確にモイラを理解している。そしてそのような視点をとること、モイラの断片的な言葉を繋ぎ合わせ、説明してゆく。あたかも、苛められて「バラバラ」になったモイラを繋ぎ、「心の中の部屋」をつくる硝子のような役割を果たすものとして、『甘い蜜の部屋』の語りはある。

ここでもう一度、「現実の世界」に対する「死んだあとの世界」として「もう一つの世界」が空想される冒頭の意味を考えてみたい。物語を通して、父と娘の「甘い蜜の部屋」が、現実とは別の世界として構築（注18）されることから、この冒頭は物語を規定する枠であり、語りの視点もこれに由来すると考えられる。つまり、冒頭部分の後、モイラの誕生に始まる物語は、冒頭のモイラによって語られる、空想の物語なのである。しかしながら、菅聡子によって指摘されるように、冒頭の時間においては「林作はおそらく死んで」いるのであるが、「語りが進行するにしたがつて、語り手の意識から現在の時間は消失し」（注19）「再び冒頭の現在の時間に戻ることはない」。「現実の世界」とは別の父娘の「甘い蜜の部屋」が構築されたとき

に、それは空想ではなく、小説世界となるのである。

## 五、終わりに

『甘い蜜の部屋』は、父の命の残り少なさという問題を、死んだあとの世界を空想することによって解決する。娘が父を恋しく思い男女関係を理解しないことによつて、宗教的空間を世俗的に見せ、破壊してゆく。そして男を死に追いやり、娘は父の元に再び戻ることになる。冒頭の語りでは、父は既に死んでおり、回想する視点がとられているが、小説内ではついに父の死は語られない。空想された死んだあとの世界が小説世界となり、冒頭の語りは、物語の中に飲み込まれることとなる。このように、女三宮と朱雀院の関係と共通する要素が、『甘い蜜の部屋』ではより積極的に、世界構築の方法として用いられている。

勿論、これまで見てきた共通点の中には、茉莉自身の経験と共通するものもあり、殊更に『源氏物語』の影響を考へる必要はないのかもしれない。例えば、逆縁の危機としてとりあげた百日咳の場面などは有名なものである。（注20）しかしながら、それを娘が死の世界から再び父の元に戻る構造として描き出すことは、単なる茉莉の経験を超えている。そして、逆縁が回避されると同時に娘が精

神的に父の元に戻るといふ女三宮と朱雀院の関係により近いものとなっている。つまり、茉莉は『源氏物語』を利用しながら『源氏物語』とは別の小説世界を構築することによって、同時に茉莉自身からも自立した小説世界を構築したのである。

このように見るならば、最初に引いた「源氏と幼女」において、『甘い蜜の部屋』と類似した女三宮と朱雀院の関係ではなく、隔たりのある紫の上と源氏との関係を敢えて意識させていることからは、茉莉のささやかな悪意と読者を試す気持ちを感じられるだろう。というのも、女三宮婚嫁によって紫の上と源氏との間には隔てが生れ、女三宮と紫の上は藤壺の姪であり当初は幼いという共通点を持ちながらも、対照的に描かれるからである。その意味で、紫の上ではなく女三宮であることが分かるかどうか試しつつ、反男女関係としての父娘関係、というテーマを暗示したものであるとも言えるだろう。そして「文学は、自分の今書いているものが一番いい、と書いて書くべきで、又そう思わずに、書けるはずがない」という一文には、『源氏物語』とは別の、茉莉にしか書けない小説を書いたという自負が、隠されているのかも知れない。

#### 【注】

(1) 『森茉莉全集・3：私の美の世界 記憶の絵』一九九三年、筑摩書房。初出『ハイスクールライフ』昭和四三年二月一日。

(2) 同右。「解題」は小島千加子。

(3) 矢川澄子との対談「父と娘の深い恋愛」（矢川澄子「父の娘」たち―森茉莉とアナイス・ニン）一九九七年、新潮社所収。初出『波』一九七五年八月号）中の発言による。なお、矢川はこの著作で「父の娘」という用語を使用しているが、矢川自身が同書の中で

ユング心理学に「父の娘」という概念がある。輝かしい父の栄光のもとに生れ、その存在にあやかうとして、ともすればみずからの女性性を蔑ろにしかねない少女、とでもいっておこうか。（「父の娘」さまざま、初出『新潮』一九九五年九月号）

とまとめる「父の娘」のあり方と、モイラは異なっている。

(4) 『森茉莉全集・4：甘い蜜の部屋』（一九九三年、筑摩書房）「解題」。「解題」は小島千加子。

(5) 『別冊国文学』必携『源氏物語を読むための基礎百科』、平成十五年十一月。

(6) 『文藝別冊 KAWADE 夢ムック 総特集 森茉莉 天使

の贅沢貧乏」二〇〇三年二月、河出書房新社。

(7) 『森茉莉全集・5：マリアの気紛れ書き』一九九三年、筑摩書房、初出『婦人公論』昭和四八年三月。

(8) なお、注3前掲書には、「甘い蜜の部屋」に「くりひろげられる父と娘との深い恋愛。これはたしかにいままでの日本文学史上だれも手をつけなかった主題ではなかろうか。強いて類例をさがせば光源氏と紫の上の交情が挙げられるが、しかしこれとても実の親子ではない」(『鷗外の娘』初出『昭和文学全集』解説、一九八九年、小学館)との指摘がある。

(9) 詳細は拙稿「『源氏物語』における「おなじところ」と「同じ蓮」―女三宮と朱雀院を中心に―」(『古代文学研究』二〇〇五年十月)で論じた。

(10) 六〜七頁。本文引用、頁数は、『森茉莉全集・4：甘い蜜の部屋』(注4前掲)による。

(11) 横笛、四巻四九〜五〇頁。本文引用・巻数・頁数は、柳井滋他校注『新日本古典文学大系 源氏物語』一〜五、一九九三年〜一九九七年、岩波書店による。

(12) 田中美代子「モイラの犯罪」(『小説の悪魔 鷗外と茉莉』二〇〇五年、試論社、初出『海』一九七六年七月)、磯田光一「乞食皇女の人工楽園」(『人工楽園の秩序』一九九〇年、小沢書店、初出『本の本』一九七六年九月号)、菅聡子「逸脱するへ父」(小森潔編叢書文化学

の越境5『女と男のことばと文学 性差・言語・フィクション』一九九九年、森話社)などに指摘がある。

(13) 「六条院の蓮の盛りは幻想上の浄土世界を思わせる」(『新日本古典文学大系』鈴虫、四巻七〇頁脚注)。六条院完成後の新春の場面にも「生ける仏の御国とおぼゆ」(初音、二巻二七八頁)とある。

(14) 注12前掲田中論文に指摘がある。

(15) 『古今和歌集』の引用は、小沢正夫、松田成穂校注『新編日本古典文学全集 古今和歌集』(一九九四年、小学館)による。

(16) 秋山虔『源氏物語の世界その方法と達成』(一九六四年、東京大学出版会)以来、様々に指摘がある。

(17) 「その背鰭を生やしたり、胴と尾を繋いだりするのが、モイラの硝子、つまり、モイラの無感情地帯から出る接着剤のやうなものらしい」(二二頁)

(18) 父娘の「甘い蜜の部屋」について「現実には無い筈の危険」(二八四頁)「現実と、ある筈のないものとの微妙な狭間」(二八七頁)との表現が用いられるなど。注12前掲田中論文、磯田論文などに指摘がある。

(19) 注12参照。

(20) 『森茉莉全集4』「解題」。

(にしはら・しほ/名古屋大学大学院博士課程後期)